
公爵家の片隅で

T M

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

公爵家の片隅で

【Nコード】

N0822T

【作者名】

TM

【あらすじ】

ゼロの使い魔の世界をベースにした小説です。

ヴァリエール公爵家を舞台にした、オリキャラによるメイドものになります。

第1話

家具磨きと言うのは、これで結構面倒なものだ。

一氣にがーっと磨きをかけられればいいのだが、意匠に合わせて磨き方を工夫しなければならぬし、あまり力を入れてやっつてしまつと傷を付けてしまうのだ。

その辺の力加減を上手く調整しながらも、やや色気が出るくらいの艶を出すのが職人芸と言うもの。無意味にテカらせるのは素人の手並みだ。

仕上げ用の雑巾でしゅしゅしゅしゅと磨き上げ、ワックスを塗つて乾かし、最後に空拭きを施す。

仕上げ終わつてやや距離とつて出来栄えを見る。

美しい。

曇りなく、それでいて部屋の雰囲気を壊さぬ嫌味のない艶。

我ながら完璧な仕上がりがだ。これならば家政婦も無言で通り過ぎるだろう。

私たちの支配人たるあのおばさんは、問題がある時はとことん口を出して来るが、納得してくれた時は無言なのが常だ。ねぎらいもお褒めの言葉もない。そうあつて当然と言うのが彼女のスタンスなのだろう。大抵の場合、他人に厳しく当たる人はよく言われないものだけど、彼女の場合は自分にはより厳しい人なので誰も何も言わない。

「ナミ」

「ひゃい!？」

そんなことを考えていたら、まさにその家政婦が音もなく背後に立つて声をかけてきた。幽霊みたいに音を出さない人だ。さすがは

風のトライアングル、『地獄耳』のヴァネッサ。

ここでうるたえると追い打ちが来るので、慌てて居住まいを正して目を伏せる。礼儀作法にはとことんうるさい人だから困る。

「エレオノールお嬢様がお呼びです。お部屋にお伺いなさい」

「かしこまりました」

エレオノールお嬢様は昨日から春休みの帰省をされておられるのだが、早速のお呼び出しと来たか。私は家政婦に一礼し、平静を装いながらも内心で脂汗をかいていた。何しろ、エレオノールお嬢様は取り扱いを間違うと酷い目に遭わされてしまうお方だからだ。

家具の周囲に散在する掃除道具を籠に入れ、メイドの特殊技能の一つ『優雅に急ぐ』を発動する。スカート裾を乱さず、全速力で用具入れに掃除道具を戻しに行く。使用人たる者、貴族様のお屋敷にあつては、間違つても雰囲気壊すようなことがあつてはならない。使用人は家の一部なのだから、家格に相応しい物腰を心がねばならない。走る等もつてのほかだ。外見は優雅に構えつつも、丈の長いスカートの中では水鳥の水かきのごとく両足を目いっぱい動かして素早く全速前進。

「あら、もう終わったの？」

用具置き場に行くと、私と同じ『ブローチ組』のシンシアがモップを手に次の任地へ出発するところだった。

雪のような肌に眩いブロンズ。私と同一年の、そばかすが可愛い女の子だ。

「お嬢様のお呼び出しよ」

「お嬢様……って、エレオノール様？」

「そう」

「あらら、お帰りになられて早速とはついてないわね」

「言わないでよ」

シンシアの相手も適当に、用具入れのドアを開けて籠を戻す。用具入れと言ってもちよつとした倉庫で、私の感覚だと8畳は余裕であるお部屋だ。やろつと思えば住める広さが用具入れ。貴族つてすごいなあ、と思う。

そのまま高速移動を続けながら身だしなみを整える。カチューシヤの角度やエプロンの汚れ。今日のコンディションなら着替えなくても大丈夫だろう。最初のころは急いで行ったら汚い恰好で来ると大目玉を食らったっけ。

ショートカットの中庭を横切ると、先輩のメイド連中が何やら探し物をしていた。

植え込みをごっそ。園丁のミスタ・ドラクロワに文句を言われなきゃいいんだけど。

「何かお探しですか？」

興味をひかれて先輩の一人に訊いてみた。

「ルイズお嬢様よ」

「ルイズお嬢様？」

「魔法の練習中に逃げ出したんですって。奥様かんかんよ。」

それを聞いて、周囲のメイド連中も声を漏らす。

「ルイズお嬢様も難儀だよね」

「まったくね。上のお二人のお嬢様はあんなに魔法がおできになる
つていうのに」

あけすけな物言いに、私はちよつとだけ腹が立った。

「あゝ、たぶん、ルイズお嬢様は大器晩成型ですよ？」

私の言葉に手を止めて、先輩の一人が振り返った。

「あら、言うわね。何か根拠があるの？」

「ありますよ。だって、あの奥方様のお嬢様ですし、ただ者で終わ
ると思う方が無理があると思いますけど」

「『ブローチ組』の勘？」

「そんなたいそうなものじゃなくて、何となくです」

『ブローチ組』と一般の使用人の間に格差はないはずなんだけど、
たまにこうやって突っかかられることがある。お給料が変わる訳じ
やないのに、何だか嫌な感じだ。

無意味に思えるほど広いお城の中を移動し、ようやくエレオノールお嬢様の居室に辿りつく。所要時間4分。我ながらまずまずのタイムだ。呼吸を落ちつけてから伺いを立てる。

『開いてるわ』

「失礼致します」

ドアを開けて入ると、真っ先に飛んでくるのはいつものセリフだ。

「遅いわね。呼ばれたらすぐに来なさい」

どれほど急いでも、必ずいただくきつい一言。でも、それがこの人の持ち味だから仕方がない。

「申し訳ございません。次からは気をつけます」

「まあ、いいわ」

エレオノールお嬢様。御歳17歳。私の5つ上だ。魔法学院に在学中で、普段は寮に入っておられるのだが、今日は帰省中だ。

「ルイズが、また癩癩を起したそうなのよ」

「まあ」

「魔法の練習中にね。随分厳しく叱られたせいで、泣きながら逃げ

出したそうよ。困ったものだわ。そうでしょ？」

「はい、お嬢様」

「本当に困ったものなのよ」

「はい、お嬢様」

「まったく……あの子ったら」

「はい、お嬢様」

苛立たしげに言葉を重ねるエレオノールお嬢様には間違っても意見を言ってはいけない。それは経験則に裏打ちされたメイドたちの鉄則の一つだ。

「……ナニ」

「はい、お嬢様」

「慰めて来なさい。方法は任せます」

微かに視線が泳いでいる。耳がちよつと赤い。少しだけ恥ずかしそうなエレオノールお嬢様。この可愛さに気付く殿方がいれば、恐らくこの方は国でも屈指の名花に上り詰めるだろうになあ。

「かしこまりました。加減はいかが致しましょう？」

「そうね……今日はだいぶ酷かった様子だから、少々強めでいいわ」

「一言申し上げてもよろしいでしょうか？」

「許します」

「お嬢様ご自身でお声をおかけになられたほうが、ルイズお嬢様もお喜びになると思いますが？」

その言葉に、エレオノールお嬢様は今度こそ真っ赤になって声を荒げた。

「馬鹿おっしやい。長女の私が甘く接したら、他に示しが見つからないでしょう。そのためあなたよ。判ったらお行きなさい」

「はい、お嬢様。失礼いたします」

ちよつとだけ必死のお嬢様に忍び笑いを漏らして、私は一礼して部屋を辞した。

ルイズお嬢様はヴァリエール公爵家の三女だ。御年6歳。年の割には小柄だが、小柄だけにそれはもう人形のように可愛らしい。ちよつとだけ癖のあるストロベリーブロンドに、端正な顔立ち。何より、透き通るようなお肌が素晴らしい。

そんなお嬢様だが、魔法がちよつと苦手だ。苦手と言うより、魔法を使うと爆発が起こると言う摩訶不思議な特技をお持ちなのだ。その爆発は結構な威力で、最初は屋内でやっていた魔法の練習を、屋外に切り替えなければいけないほどだった。その決定にはルイズ

お嬢様もちょっと傷つかれたようだけど、さすがにあそこまでしょつちゅう建屋が破壊されては公爵様もたまらなかつたに違いない。国中から優れた家庭教師が呼ばれているけど、どうしても上達しないルイズお嬢様。最近はずすがにちょっとお疲れ気味で、何かにつけて癩癩を起されるようになっていた。何ともお勞しいことだ。

中庭の池に行くと、小舟がゆらゆら揺れていた。

私は杖を抜いて、静かにルーンを唱える。ふわりと飛んで、静かに小舟に降り立った。

「見つけましてよ、ルイズお嬢様」

出来るだけ優しい声をかけると、泣き腫らした目で私を見上げるお嬢様。

「ナミ……」

「また上手くいかなかったのですか？」

私が声をかけると、ルイズお嬢様はまたぼろぼろと泣き出した。泣き顔も可愛いと言つのは何ともずるいと思う。

「ねえナミ」

「はい、お嬢様」

「私、どうしてうまくいかないのかな」

「それは、わたくしには判りかねます」

そうお応えすると、またぼろぼろ。

これは確かにお慰めするのは大変そうだ。エレオノールお嬢様の御指示はやや強めにお慰めせよとのこと。

良く判っていらっしやる方だと思つ。

「ですが、わたくしにも判ることはございますよ。」

「ん？」

「春は必ず来ると言うことです」

「春？」

「ええ。でも、春の前には長い冬があるのです。ルイズお嬢様にとつて、今は、その冬なのだわたくしは思います」

私の言葉を黙って聞いていたルイズお嬢様は、しばらくすすんと鼻を鳴らしていたが、程なく落ち着き、私に泣き止んだ顔を向けた。

「……お話して」

「お話、ですか？」

「あのお話、して」

「かしこまりました」

私は笑って話し出した。

ルイズお嬢様が、一番気に入らっしやるおとぎ話。

むかしむかし、あるところに御濠に囲まれた大きなお城がありました。

その御濠に、アヒルの親子がおりました。

雛たちは生まれたばかり。みんな黄色くて可愛らしい雛ばかりでした。

ですが、その中に一羽だけ灰色の、すごくみにくい雛がおりました……。

「お疲れ〜」

一足先に私が部屋に戻っていると、シンシアが疲労困憊と言う顔で部屋に飛び込んできた。

そのまま自分のベッドにダイブ。着替えてからのほうが良くない、そついうの？

時刻は夜の9時。私たちは二人とも夜番ではないので、今日はこのまま眠れる。

「早く着替えなよ。シーツ、汚れちゃうよ」

「はあ、着替えるのも億劫だわ」

そう言いながらテキパキとお仕着せを脱ぎ始めるシンシア。うん、同じ年のくせに、相変わらず出るところ出てるなあ。でも、だいぶ今日は疲れているみたい。確か浴室の徹底清掃だったっけ。高いところ専門で飛び回ったんだろうなあ。

そんなシンシアを見ていて思い出した。

「あ、そうだ。今日実家から届いたんだ」

「何？」

首を傾げるシンシアに、荷物の中から瓶を取り出す。

「じゃ〜ん」

「うわ、うわ、すごい！」

取り出したのは透明な液体が満ちた瓶だ。私の実家で作っている発泡酒。

シンシアが特に好きなシャンパンだ。

「欲しい？」

「決まってるでしょ。一人で飲むなんて言わないわよね」

「ふふふ、欲しかったら三べん回ってにゃんと鳴け」

「何回だって回ってあげるわよ」

「嘘だよ。回らなくていいからグラス出して」

そんな感じにじゃれていると、ドアが3回ノックされる。

ドアを開けると、隣の部屋のソフィーが立っていた。私より頭一つ背が高く、妙に姿勢がいい子だ。凜とした雰囲気は何だか軍人みtainな感じで、眼光も鋭い。

「遅くにすまん。借りた本を返しに来た」

「もう読んだんだ？」

「実に有意義な本だったので、なかなか切るところが難しくてな。一気に読んでしまったよ」

「寝不足はまずいよ？」

「そこは気力で何とかする。お、何だかいいものがあるな」

ソフィーが目ざとくデスクの上の酒瓶を目に止める。

「ソフィーも飲む？」

「相伴に与れるなら幸いだ」

「行きまゝ」

栓を捻ると、小気味いい音を立ててコルクが飛んだ。シンシアが嬉しそうに拍手する。

「それにしても……」

グラスに満ちた泡立つシャンパンを見ながら、ソフィーはしみじみと呟いた。

「本を拝読したから言う訳ではないが、ナミの祖父殿の才能には改めて驚かされるな」

「そう?」

返してもらった本を棚にしまいながら、私は首を傾げる。本は、私のおじいちゃんが書いた経営に関する実用書だ。私が読んでもあまりよく判らないけど、ソフィーの嗜好には合ったみたい。詳しくは聞いていないけど、ソフィーの家は結構な貴族で、領地も役職も相応に持っているけど、当代に入ってから領地経営がなかなかうまくいっていないらしい。今度、思い切って干拓事業にも手を付けるとか言ってたけど、それもうまくいかは半信半疑なんだとか。

そんな彼女は私のおじいちゃんのことを知っていて、しばしば私におじいちゃんの話の聞きに来る。

ゆくゆくは、自分が領地再建に乗り出すのだと口に出さないまでも全身で主張している感じだ。そのための知識の集積に、今は必死になっているのだろう。

「このシャンパンというのもそうだが、生み出した産品は実にユニークだ。どうすればこのような発想ができるのやら。興味深い」

「何だかどつかのすごい人みたいに思ってるかもしれないけど、普通の人だったよ?」

「ナミのおじいさん、もう何年？」

至上の幸せといった顔をしてグラスに口を付けているシンシアが、我に返って話に混ざってきた。

「3年かなあ」

「つくづく、惜しい方を亡くしたと思う。もう少し早くお前と縁ができていたらと思うよ」

さも悔しそうにお酒を飲むソフィー。

そんな風に人々に偉人みたいに言われるおじいちゃんだけど、私にはあまりピンとこない感じだ。

年をとつてもいたずらか面白くことが大好きで、思いついたらまずやってみるという元気あふれる人だった。このシャンパンや、多くのアイディア商品を生み出して実家のお店を結構な規模まで成長させたし、慈善事業とかいろんな社会貢献でも名前を知られた人だった。でも家だとひょうきんな普通のおじいちゃん、王都のちよつとえつちなお店に出入りして、それがばれておばあちゃんにこつぴどく怒られて泣いて謝っていたような人だった。

孫は私だけだったけど、その分すごく私を可愛がってくれた。いろんなお話をしてくれたし、私がこの家に奉公に上がる時にも、いろいろ骨を折ってくれた。むしろ、積極的に私を公爵様のお城に行かせようとしていたような気がしないでもない。

そんなおじいちゃんだけど、いつも言っていたのが何故かルイズお嬢様のことだった。

何でも『ヴァリエール公爵様の三女はすごいお方になるぞ。いつか必ずこの国を救うお方になるからな』とのこと。

まだルイズお嬢様がお生まれになる前から酔っぱらうたびにそん

なことを言っていたけど、そんなルイズお嬢様は魔法についてはちよつと将来が不安な感じ。

でも、おじいちゃんの予言って当たるんだよね。

……何だか私にはよく判らないや。

そんなことを考えながら飲んでいたら、あっさりとお酒が回ってしまった。

実は結構弱い方だったりする。

お酒の残りをシンシアとソフィーに任せて、私は早々に布団にもぐりこんだ。

寝つきの良さには自信がある。目を閉じれば10数えるうちに夢の世界だ。

眠りに落ちる時の、すんとした感覚は好きだ。

明日もまた、一日頑張らないと。

第2話

眠い。

実は朝は苦手な私だ。今日のように寒いと尚更辛い。それでもえいやと起きだして、寝巻を脱ぐ。

「シンシア」

同室のシンシアに声をかける。声をかけるのは一度だけだ。無反応なのを確かめて、一気に布団をはいだ。

「ひゃ〜」

と悲鳴を上げてシンシアが覚醒する。毎朝毎朝、そろそろ懲りないかな、このパターン。

隣でぶつぶつ文句を言っているシンシアをほっというて、午前着に袖を通す。

今日は奥方様の入浴のお手伝いから。

水仕事向きのエプロンを身につけ、最後に胸元にブローチを付ける。

マントを模ったブローチ。

私たちが『ブローチ組』と言われる所以だ。

メイジと言うのは貴族だけを指す言葉ではない。

この国では貴族は例外なくメイジだけど、メイジが全て貴族と言う訳ではない。

そんなメイジだが、家も名もないメイジは平民と言う身分に落ち着く。

平民なので、当然働かないと食べていけない。

私の父親は祖父の代からの商人なのだが、母親が傭兵メイジだったためか、私にはメイジの素養があった。

そんな私が将来のためにと放り込まれたのが、大貴族たるラ・ヴアリエール公爵家だった訳だ。

実際、平民だけでなく格が低い家の婦女も行儀見習いとして大貴族に奉公に出るのは一般的ではある。裕福な家ならば魔法学院あたりに通ったりもするけど、学費が工面できない貴族は大貴族のところに奉公に出てささやかな人脈と礼法を身に付ける。それが嫌なら軍に入るしかない。

ここで問題になるのが、メイジの象徴たるマントだ。

メイジと言えばマント。

私も父が見栄で作ったマントを持っているが、さすがにお仕着せの上にマントを着ていては仕事にならない。

そういう奉公人に対し、マントの代わりに支給されるのがこのブローチだ。

魔法が使える奉公人。それを指して『ブローチ組』と言われている。

魔法が使えると言っても私は水のドットに過ぎないし、お給料についても魔法が使えない使用人と差別されていない。使用人の能力は、魔法意外によるところの方が大きいのだ。例えば、ちょっと見た目が残念なトライアングルメイジと、誰もが振り返るような美女が使用人として申し込みをしたら、貴族様は後者を取るのが普通だ。

使用人は家の一部。家具と同じだ。誰かに見せるパーツは、見栄えこそが重要という訳だ。接客担当の先輩たちなんか、どこの妖精の世界から来たのやらと思うくらいに美人ぞろいだし。もちろん、美貌を兼ね備えたブローチ組の先輩となるとお給料はかなりの額だ。場合によっては2号夫人の座も狙える。なかなか出世街道ではある。

朝、最初のイベントは朝礼だ。

全員が整列して、家政婦のヴァネッサ女史や執事のジェロームさんから伝達事項を窺う。

今日の来訪者や、公爵様やご家族の御予定、それから作業の分担。今日みたいに、先に予定が判っているような場合は前日に申し付けられることもある。

それだけにこの朝礼はすごく重要なもので、当然ではあるが、遅刻をしたらキツイ罰がある。最低でも減給、最悪の場合は雇いを解かれてしまう。

必要最低限の伝達だけが行われ、終わると同時に私とシンシアは浴室に向かって例のごとく優雅に急いだ。

湿度が高い浴室に、美女が湯浴着を着て浴槽に浸っている。

3児の母にして四十代の奥方様。だが、これを見てそれを素直に受け入れられる者はいないだろう。

張りのある肌、艶のある髪。それに加えて凜とした気品のある色気。どう見ても三十代前半から中盤。後半までは絶対にいってない。目力が刃物のように鋭くなければ、食虫植物に引き寄せられた虫のように幾らでも若いツバメが寄ってくることだろう。

でも、実はこの奥方様は御主人が大好きで、時折微妙に見せるちよつとだけ甘える仕草がとんでもなく可愛い。

この歳の方に可愛いと言つのも変だが、本当に微笑ましい時がある。

ある朝、御夫婦が揃って寝室から出て来たところに偶然出くわしたことがあるのだが、その時、御主人に『相変わらず、君は可愛いな』と言われた時は首まで真っ赤になって怒っていた。何だか女の子がそのまま大きくなって怒っているような雰囲気、見ていてすごく優しい気持ちになったものだった。

将来は、ああいう夫婦になりたいものだと思つ。

そんな事を思いながら、ふと私の隣に立つ同僚を見て、私は慌てて肘で突いた。

シンシアという子は愛嬌があつて大らかな楽しい子なのだが、一つだけ困つたことがある。

綺麗なものが大好きなのだ。

それは生き物や草花、果ては美女に至るまで実に節操がない。ルイズお嬢様を見た時に緩みまくつた笑顔を浮かべていたのを見た時はてつきり同性愛指向の危ない子なのかと思つたくらいだが、夜のガールズトークで確認した範囲では性癖は至つて普通だったので驚いた。要するに、ただ単に美しいものが好きなだけらしい。

しかし、奥方様の入浴姿を星を散らした目で見ながら口元から涎を垂らしている姿は、どう見ても痴女のそれだ。うっかり誤解されたら暇を出されてしまいかねない。本当に自重して欲しいと思つ。

「出ます」

ざばーっとお湯をかき分けて奥方様が立ち上がり、歩くのに合わせて私とシンシアを含めたメイドたちが奥方様に取りつく。彼女の歩みを止めぬよう、動きに合わせてタオルで拭きあげていくのだ。

貴族の女性は裸を見られても平気なのだが、奥方様も堂々としたものだ。しかし綺麗なお肌だなあ。秘訣とか教えてもらえないかしら。

その後は脱衣所の椅子に座つて髪結いの出番。綺麗に水気を取られた髪が、丁寧に整えられていく。その間は当然全裸の奥方様。もちろん風邪をひかぬよう脱衣所の保温は確保されている。

髪が整えられると、またもメイドが寄つてたかつて御召し物を着せていく。この辺のセンスは奥方様専属のレディスマイドの腕の見せ所だが、センスと言つただけに才能が大きくものを言う。奥方様は

綺麗な方ではあるが凜とした方でもあるので、その魅力を最大限に引き出す服や小物のチョイスにはなかなか気配りが必要だろうと見ていて思う。

家の方々が朝食になると、その間に私たちも朝食をいただく。私たち下っ端のハウスメイドの仕事には、同僚へのお給仕も含まれている。先輩方のご飯は後輩が面倒をみるのが習わしだ。歳が行くに従って、自然と抜けて行くのが女性使用人の世界。いつかは私も年長になって、ご飯のお給仕してもらって、最後は嫁に行つてここを去るのだろうか。今の私は、何だか自分が誰かの嫁になるということが、今一つピンとこない感じた。

周りにはどこかの貴族の御子息に見初められて、と夢見る子もないでもないが、私は妾は嫌だ。多少貧しくても、出来れば笑つて旦那さんと手をつないで歩きたいし、子供が生まれたら、その両手を旦那さんと片方ずつ握つて三人でお散歩するのが野望でもある。子供を乳母に取られ、正妻さんに気を使いながら生きるような生活はごめんだ。

食事が終わつたら本格的に午前中の仕事が始まる。

私たち、ハウスメイドの仕事は、何を置いても掃除だ。ただゴミや埃を掃き清めるだけでなく、建物の中のいろんなものを磨き上げるのも仕事の内だから大変だ。金属などは、固定化がかかっていれば錆びる心配はないが、曇つたり埃がたかることは他の調度と変わりはしない。

朝食が終わつたら私とシンシアは部屋に戻り、今日の作業専用の服に着替える。

一見するとフットマンのような半ズボン姿。要するに男装だ。

用具入れから作業のための道具を取り出していると、通りすがりの男性使用人連中が笑つて話しかけてくる。

「よう、坊主。どこから迷い込んだんだい？」

楽しそうに笑いながら話しかけてくるのは、3つ上のフットマンのジャンだ。私と笑いのツボが合うのでよく話すのだが、彼は魔法が使えない普通の使用人。実家はタルブ地方のワイナリーだったわけ。おじいちゃんもあの地方のワインについては良く褒めていたな。そんなジャンの悪意のない笑い声に、威勢よく男言葉を返す。

「うるせー、ばかやるー」

お互いに笑いながら別れ、私とシンシアが向かう先は正面ホールだ。

「遅いぞ」

ある意味、お城の顔ともいえる正面ホール。そこには既に半ズボン姿のソフィーが待っていた。背が高く、凛々しいソフィーがこういう格好をすると、そのまんま美少年と言った感じだ。シンシアの琴線に触れるクラスの美しいかつこよさがある。どこを切っても平凡の二文字しか出てこない私としては、羨ましいことこの上ない。今日のスタッフはこの『ブローチ組』の3人。いつものメンバーとも言える。

「それじゃ、一番手行きます」

私は手を上げて宣言し、ルーンを唱えてひよいと天井に向かって飛んだ。

正面ホールにある、最大級のシャンデリア。

これの煤落としが今日の午前の仕事だ。

作業は三人一組。一人が雑巾を絞って、もう一人がその雑巾を受け取ってシャンデリアを磨き上げていく。残る一人は安全管理だ。大きなシャンデリアではあるものの、大の大人が乗っかって仕事をすると壊れかねないので、担当するのは主にまだ小さい私たちのようなハウスメイドのスタッフだ。

別に初めてという訳ではないので段取りは判っている。テキパキとこなしていけばいいのだが、いかせんシャンデリアと言うのは構造が複雑なのでかなり危ない体勢で磨かなくちゃいけない部分もある。照明も一個一個がマジックランプなので、一個でも落としたら大変な損失になってしまう。もしもの時は、下にいる安全管理担当に魔法で受け止めてもらうことになっている。その落ちるものの中には、私も含まれているけど。それで調子に乗ってかなり無茶なことをやることもあるけど、あんまり危ないマネをしているとソフィーが怒りだすのでここは自重。

途中で何回か三人で役割を交代してでっかいシャンデリアを磨き上げていく。何だかんだで午前中いっぱいはどうしてもかかってしまう作業だ。

シャンデリア磨きが終わったら、いったん着替えて昼食だ。

朝ご飯より軽めだけど、軽くないと午後の仕事に差し障るから、ちよつと物足りないくらいが適量とも思える。

メニューはパンと簡単なサラダだ。

食べ終わったら大急ぎで午後の服装に着替え。

今日の私の担当は、スタッフたちへのお茶の手配だ。午後の作業の3時に合わせて、お茶とお茶菓子が支給されるのだが、それを配って回るのがお仕事だ。メイドたちは城内のお仕事がほとんどだから交代で使用人ホールでお茶をいただくけど、外で働く人たちには

お茶を持って行ってあげなければならない。園丁や厩務員のような方々がその主な対象だ。これについては相手も楽しみにしているだけに、うっかり遅れると嫌な恨みを買うのでこれまた手を抜けないお仕事なのだ。

「お待たせしました、お茶です」

例によって『優雅に急ぎ』ながら、まずは厩舎に茶道具を届ける。ポットとカップ、そして茶菓子の載ったお盆を届ける。ちなみに今日の茶菓子はフルーツケーキだ。さすがは公爵様のお抱えコックだけあって、もらえる茶菓子は私たち使用人向けでも実に美味しいのだ。

「お、待ってたよ」

嬉しそうに厩務員の若手が出てきてお盆を受け取る。ちなみに茶道具の回収は私の仕事ではなく、寮に帰る途中で彼らが厨房に返るのが習慣だ。

厩務員のお仕事は、結構厳しいと思う。馬は気難しい動物みたいだし、蹄鉄の管理などについては、たまに馬に蹴られるとかの事故も起こるんだとか。何というか、男の世界だと思う。

厩舎の印象は、とにかく臭う。馬のうんちがある場所なのだから仕方がないけど、それ以外にも飼葉なども結構慣れない匂いを出している。その次に来る印象は、怖い。馬は大きいからとにかく迫力がある。近寄ると噛まれることもあるし。

でも、何より怖いのが、ひととき大きな建屋にいるマンティコアだ。魔獣マンティコアがどうして飼われているのか知らないけど、正直、この魔獣は見た目からして怖い。馬と違って飛ぶし。でも、馬みたいに繋がれているわけじゃないから、睨とかはしっかりされ

ているのだろう。実際にはもうだいぶお年寄りで、若いころほど元気はないんだとか。別に近寄っても噛みつくわけじゃないけど、やっぱり怖いものは怖いのだ。

一通り回って、最後は園丁のおじいさんのところだった。

「お待たせしました」

元気よく園丁の管理小屋に入ると、無人だった。どこかな、と思ったら裏から声が聞こえた。

お盆を持ったまま裏に回ると、園丁のおじいさんが落ち葉を集めてたき火を起こしていた。

一体何歳なのか判らないくらい歳を取った園丁の名前はミスタ・ドラクロワ。一見気難しそうだけど、実は結構いたずら好きな茶目っ気のあるおじいちゃんだ。でも、園丁としての腕はかなりの物なのだそうだ。

「良いところに来たのう」

ミスタ・ドラクロワは笑いながらたき火をかき分け始めた。たき火の下には砂の山。その中に火ばさみを入れて、何やら藁でくるんだ塊を取り出した。

「ほれ、おすそわけだ」

お皿に乗せたそれを受け取り、熱さに気を付けながら藁を取って驚いた。

「おイモ？」

「そこに塩があるから、皮を剥いて振って食べ。うまいぞ」

お仕事中なだけに、何だかいけないことをしているような気もするが、共犯者がいるからちよつとだけ気が大きくなった。

言われたとおり皮を剥くと、ほかほかであつあつのおイモがほわっと湯気を立てた。

半分にしたそれにお塩を振ってかじってみる。

「うわ、美味しい」

ほのかに甘くて香ばしいおイモと、お塩のハーモニーが何とも言えない感じだ。

「そうじゃろつ……おっと、これはいかん」

嬉しそうに目を細めていたミスタ・ドラクロワがいきなり慌てたので後ろを振り返ると、背が高い女性が腰に手を当てて立っていた。

「め、メイド長……」

我ながら引き攣った顔をしていたと思う。そこにいたのは、メイド長のミリアム女史だった。

25歳くらいだと思うけど、実際には年齢不詳。王都生まれの美人さんだ。面と向かって行き遅れと言ったら、恐らく往復ビンタが飛んでくるようなおっかない人だ。

「どこで油を売っているの、あなたは」

腰に手を当てたまま、私に凍え死ねと言わんばかりの冷たい視線と冷たい声を浴びせてくる。

「す、すみません」

御馳走になっている恩義があるのでミスタ・ドラクロワを売る訳にはいかない。

ここは私一人が罪をかぶって平身低頭の一手だ。

「ミスタ。あなたもあなたです。困りますよ、部下の仕事の邪魔をされては」

「いやはや、すまんね」

あまり悪びれていない感じでミスタ・ドラクロワが頭をかいていく。

「まったく……それ、余分はありますか？」

ミリアム女史が指差したのは、ミスタ・ドラクロワの持っているおイモだった。

「む、たくさん作ったからまだまだあるぞ」

「ここは、それ一つで手を打ちましょう」

「相変わらず話が判るのう、おぬし」

ミスタ・ドラクロワがお皿に乗せておイモを差し出すと、ミリアム女史が私に向かって手を伸ばしてくる。

「お塩」

「は、はい」

慌ててお塩の瓶をその手に乗せる。

「いいわね、これであなたと私は同罪。他言無用よ」

「もちろんです」

そんな、穏やかな午後。

第2話（後書き）

すみません、まだちょっとシステムの使い方がわかってません。

第3話

悲鳴が聞こえたのは、午後の作業の時だった。

シンシアと一緒に客間の一つの家具磨きをやっている最中に聞こえた、鶏を絞め殺すような悲鳴。

音源は、一つ上のフロアからだった。

思わず顔を見合わせる私たち。私とシンシアはその原因に心当たりがあったので、慌てて駆け出した。

階段を駆け上がると、そこに案の定一人のメイドが青くなって倒れていた。ソフィーだった。

いつもは凜々しいこの子が、あられもない恰好で倒れている。

私とシンシアはため息を吐いた。ソフィーが悲鳴を上げて倒れているのはこれが初めてではない。

「こら、またお前か」

ソフィーの隣をぞぞと這っているのは、一匹のでっかい蛇だった。毒はないけど、その巨体を使って敵を絞め殺して食べるタイプの蛇だ。

こいつはしばしば本来の居場所から脱走しては、何故か蛇が大の苦手なソフィーの真上から落下する習性がある。

他のメイドでもいいだろうに、何故か狙われるのはソフィー。何か美味しそうな匂いでも出ているのだろうか。

「シンシア、ソフィーお願い。私はいっつを届けて来るわ」

「一人で大丈夫？」

「何とかするわよ」

さすがにシンシアも女の子だから、蛇の類はあまり好きではないようだ。私は都会の育ちだけど、おじいちゃんにはしばしば山や川に連れて行ってもらっていたから蛇とか蜘蛛とかは結構平気だ。

10キロほども重さがある蛇を抱えあげ、本来の居場所であるお嬢様の部屋に運ぶ。レビテーションを使った方が楽だけど、意味もなく使うと結構疲れるんだ、あれ。

「本当にもう。お前、あんまりあんなことしてるとお嬢様に黙って蒲焼にしちゃうぞ」

山に行くたびに、おじいちゃんが蛇を取ってきて美味しく焼いてくれたのを思い出す。『蛇は山のニシンだ』とか言ってたけど、ニシンというのが何なのかは未だに判らない。

そんなことを思いながら私が食べ物を見る目を向けると、その視線の意味が判るのか、蛇がちよっと落ち着きを無くす。こいつとの上下関係に関しては、私の方が上位なようだ。

程なく、温室のようになったお嬢様のお部屋の前に立つと、確かに少しだけドアが開いていた。

「ほら、お前の居場所はここだよ。もう出てきちゃダメだよ。本当にそのうち食べられちゃうからね」

判っているのか判っていないのか、蛇なだけに表情からは判らないけど、そのままぞぞぞと動いて部屋の中に入って行った。

「あら、どうしたの?」

蛇の帰宅を見届けていると、背後から声をかけられた。振り返ると、私と同じ年くらいの桃色がかったブロンドの女の子がいた。

これが公爵家の次女であらせられるカトレアお嬢様だ。このお部屋の主でもある。

「こちらの蛇をお届けにあがっております」

「まあ、ありがとうございます。よく言い聞かせているんだけど、どうにも冒険が好きみたいで」

蛇と会話できるのか、という疑問はあるが、何となく浮世離れしたこのお嬢様ならできそうな気がするから不思議だ。

「それと、きちんと叱っておくから、できれば食べないであげてね」

……まぢい。聞かれていたか。

「申し訳ございません」

平身低頭する私に微笑むカトレアお嬢様だが、何か思いついたように手を打った。

「あなた、ナミだったわよね？」

「はい」

「ちょうどいいわ。お茶の用意をしてもらえるかしら」

「はい、すぐに担当を呼んで参ります」

「違うわ。あなたに話があるのよ」

「私ですか？」

いささか驚いた。さて、蛇を食べようとしたことがご機嫌を損ねてしまったのだろうか。

「あの、何か至らぬ点でもありましたでしょうか？」

「そういう意味ではないわ。あら、ちょうどいいわ。ミリアム！」

長い廊下の彼方を歩いていたのは、我等がメイド長だった。相変わらず姿勢が良く、クールビューティーを形にしたような雰囲気のままき散らしている。

「お呼びでございますか？」

「ちょっとこの子を貸してもらえないかしら。仕事申中だと言つのは判っているけど」

カトレアお嬢様の言葉に、ミリアム女史が冷たい視線を私に向けて来る。

メイドの特殊技能の一つ『目と目で通じあう』の発動だ。

『ナミ。あなた、何をやったのですか？』

『し、知りませんよ。私、迷子の蛇を連れてきただけですし』

『でも、お嬢様があなたのようなメイドに声をかけるといいうのも珍しいですよ?』

『だから見当もつかないんですけどば』

そんなやり取りをしていると、カトレアお嬢様が焦れてきたようだ。

「ごめんなさい、ちょっと私も疲れてきたので、早く部屋に入って欲しいんだけど」

催促され、ミリアム女史はようやく諦めたようにため息を吐いた。

「あなたの持ち場にはサポートを回しておきます。くれぐれも粗相のないように。いいですね?」

「は、はい」

カトレアお嬢様の部屋はある意味魔窟だ。植物や動物がこれでもかというくらい溢れている大部屋で、一步入ると鉢植えだの動物だの鳥だの何のと、まあすごいのだ。動物たちはみんなお嬢様になっ
ているんだけど、植物の生育が妙に活発なものどこかお嬢様のお人柄に関係があるのかも知れない。

そんなお嬢様のお部屋の片隅に備え付けの水場があって、そこを使ってお茶を沸かす。これでもメイドの端くれだから、お茶の点て

方の基本くらいは知っている。でも、本職にお願いした方が絶対美味しく入れられると思うんだけどなあ。偉い人が考える事はよく解らない。

淹れたお茶を持ってお嬢様が待つテーブルに持っていく。

「お待たせいたしました」

できるだけ優雅な手つきを心がけながら温め済みのカップに注ぐ。うっ、さすがは高級品。いい香りだ。

「ありがとうございます」

お茶を一口飲んで、カトレアお嬢様は微笑んだ。

「美味しいわ」

「恐れ入ります」

「あなたもそんなところに立ってないで、そこに座ってちょうだい」

カトレアお嬢様が、自分の対面にある椅子を指さした。

「ご、御勘弁を」

貴族の、しかも雇用主である家のお嬢様と同じテーブルに座るなど、あつてはならないことだ。いくら相手に勧められたからと言って、はいそうですかと座った日には、それを見られた時点で御屋敷を叩き出されてしまうだろう。もちろん、そんな失礼を働いたメイドに再就職先なんか見つからないだろうし。

「あら、つまらないわね」

口をとがらせるお嬢様。何だか気品がありながらも可愛い感じだ。実はカトレアお嬢様はお体があまり丈夫ではない。病気がちで、しよつちゆう治療士のお世話になられている。すごく美人だし、魔法もお上手なのに、社交界にもあまり顔をお出しになっていない。そんな事情なので友達もあまりいないようで、いつもこの部屋で動物を相手に過ごしおられる。何だからすごくもったいない感じだ。すごく優しいかただし、それでいて思いやりがあつて、たまに面白いことをやったりするお転婆な面もある。私が男で貴族でそこそこ立場があれば、恐らく花束を抱えて愛を囁きに来るだろうに。

「そうそう、あなたに訊きたい事があつたのよ」

私がお茶を飲む様子を見ながら不届きなことを考えていると、カトレアお嬢様はようやく思い出したように手を叩いた。

ようやく本題だ。本当に何か粗相をしてしまったのだろうか。

「あなた、ルイズによくおとぎ話をして下さるんですって？」

あらま、意外なところから話が繋がっているものだ。

「下世話な話ばかりで恐縮ですが」

「そうでもないわよ。あの子が話してくれたお話、本当に面白いものが多いもの」

お褒めに与り恐悦至極だけど、それにしてもさすがはルイズお嬢様。一度聞いたただけの話を誰かに話せてしまうとはすごい記憶力だ。

「でも、たまに意地悪されるって言ってたわ」

「意地悪ですか？」

全く身に覚えのない話には首をかしげた。

「申し訳ありません。心当たりがないのですが」

「変ね。たまにすごく怖い話をされるって言うていたけど？」

「そんな変な話はしませんよ」

「この間なんか、私のところに来て『怖い話を聞いたら怖くて眠れなくなつた』って言うてたけど」

「どついうお話でしょうか？」

「う〜ん……題名とかは判らないけど、あれよ。お城の堀で魚を捕つた王都の豪商に向かっておばけが『おいてけ〜おいてけ〜』って手招きするっていうお話」

「ああ、『おいてけ堀』ですな」

何の事かと思つたあの話のことか。

「あれは怖い話じゃなくて面白い話ですよ。『おいてけ〜』って台詞を面白おかしく言うことでウケを取るお話なんです」

これはおじいちゃんが実に上手だった。夏になると家に御近所の人を集めて、蠟燭を一本だけ点けておじいちゃんの話聞いたもの

だ。そんなおじいちゃんの得意技の一つがこの『おいてけ堀』というお話で、お話の中でおばけが『おいてけ』と言う辺りのおじいちゃんの声色を聞いたびに、私たち子供はお腹を抱えて大笑いしたものだ。でも、何だかカトレアお嬢様の視線は疑わしい感じだ。

「それ、本当に面白いお話なの？」

「そうですよ。逃げる先々に顔なしのおばけが出て来るなんて面白いじゃないですか」

「そ、そうかしら？」

「本当に怖いお話は、あんなもんじゃありませんから。祖父はそういう話の語り方が非常に上手で、夜に思い出すだけでおトイレにも行けなくなっちゃいます」

あれこれといろんな話の例を出しての私の解説を聞きながら、カトレアお嬢様は目を丸くして驚かれた。

「あなた、いろいろお話知っているのね」

「ええ。祖父には、女は千の夜を語り通せるくらいお話を知っているべきだと言われまして」

そんな私の言葉に、カトレアお嬢様は小首を傾げて考え込み、そして嬉しそうにお笑いになる。

「面白そうね。ひとつ聞かせてもらえない？」

「え？」

「聞かせてちょうだい。あなたが言う、その怖いお話」

いきなりな御用命に、私はちよつと慌てた。

「あの、私はへたつぴですよ。祖父ほどは上手く話せませんし。あと、本当に怖いお話はあまりお勧めできませんけど」

「いいわよ。内容が面白いなら。それに、まだ明るいから、そんなに怖い雰囲気にはならないでしょう?」

本当に嬉しそうなカトレアお嬢様。どうやら勘弁してもらえないようだ。

「そういうことでしたら……」

「待つて。ルイズも呼んでくるわ」

ルイズお嬢様に聞かせる、つて、カトレアお嬢様の方がちよつと意地悪じゃないかと思うけど。それとも、ルイズお嬢様と一緒に寝るのが狙いなのかしら。

いろいろとカトレアお嬢様なりに思惑はありなのだろうけど、そういうことならこっちは責任重大だ。

さて、何の話をするればいいかなあ。ドリアドに襲われる木こりの話でもしようかしら。

翌朝、私はメイド長に呼びだされた。

「あなた、昨日カトレアお嬢様に何をしたのですか？」

「お話をお聞かせしただけですけど？」

「夜中に呼びだされましたよ。一緒に寝て欲しいって。何年ぶりかしらね、ああいうの」

「まあ」

「ルイズお嬢様はベッドに粗相をなさったし……本当に何もやってないのでしょうね？」

「本当ですつてば」

そんな一日。

第3話（後書き）

詳細は『十六人谷』で

主人公の外見のイメージは「黒衣マト」っぱいと思っていただけると幸い。

第4話

その日は、朝から城中がバタバタと忙しかった。

割り当てだった階段周りの清掃が終わり、私は急いで使用人ホールに戻る。

今日の作業は、まさに城中を磨き上げなければならぬのだ。猶予は明日まで。もたもたしている暇はない。私たちメイドとしては、ちよつとハードな一日だ。

ホールに入り、戦場のように騒がしい中で大声を張り上げる。

「1番の階段周り、終わりました！ 確認お願いします！」

「御苦労様」

中央に陣取っているメイド長のミリアム女史に報告していると、私に続いてシンシアがパタパタと戻ってくる。

「3番の廊下、終わりました」

息を切らしていないあたりはすごいけど、足音を立てるところを見るとシンシアにもちよつと疲れが出ているのかも知れない。メイドは無音であれ。いつも言われている鉄則だ。

「御苦労様。確認しておくから、続けてシンシアとナミはリネンの手伝いに出て下さい」

お客様があると、ヴァリエールのお城は一気に騒々しくなる。押しも押されぬ大公爵、しかもゲルマニアと国境を接している最前線でもあるヴァリエール公爵家の来賓となると、相応に格の高い家の方と相場は決まっている。下手な失敗をした日には晒し首すらあり得るだけに気が抜けない。明日のお客様は、確かマルシヤック公爵様。それくらいの家格ともなると、王家の方々並みの準備が必要だ。

一番大変なのが料理人部隊だ。材料の吟味だけでも胃が痛くなるだろう。同じように胃を痛めているのは、恐らく執事のジェロームさん。今頃ワインの選定に頭を悩ませていることだろう。

そんな、使用人たちにとっては戦争のようなひと時。

私たちが、急いで客間の手伝いに中庭を抜けている時だった。

微かな羽音を立てて、一匹の蜂が私たちの前を横切った。

その瞬間、私の中で強烈なブレーキがかかった。知らぬ間に息が荒くなり、勝手に心臓が鼓動を早めてしまう。恐らく顔色は真っ青になっているだろう。

「ナミ」

私の異変に気付いたシンシアが私の名を呼びながら、私を支えるように肩に手を置いてくれる。こう言う時は人肌のぬくもりはありがたい。彼女は、私のトラウマを知っている。

「大丈夫？」

「な、何とか」

えへへと笑って、私は再び客間に向かって急いだ。

日頃はお気楽な私でも、苦手なもの一つもある。
それが蜂だ。

あれは公爵様のところに奉公に出てすぐの事だから2年前。私は10歳。若かったなあ。

その日、公爵様の御都合がよろしいとのことと、一家揃って遠乗りにお出かけになられることになった。

ヴァリエール地方は自然が多く、四季折々の景観はそれぞれ美しいのだが、春先の野原はそれはもう美しい花畑で、エレオノールお嬢様やルイズお嬢様はもちろん、お体が弱いカトレアお嬢様も嬉しそうに花を編まれていた。

馬にお乗りになっっている御一家とは別に、私たちメイドは馬車で昼餐の場所に先回りして食卓を整備する。

空は雲ひとつない青空。外での食事はすごく気持ちいいだろう。土メイジがかまどの用意をしている傍ら、てきはきとスタッフたちがテーブルのセッティングを進めていく。配膳担当の私としては、食器を落としたら大目玉なのですごく緊張する仕事だ。

そんなこんなで準備が整い、もうじきお昼というその時だった。

「全員、手を止めて聞きなさい」

ミリアム女史が大股で歩いて来て、いつにもまして真剣な表情で声をあげた。いつものように優雅に急いでいる訳ではない、ただならぬ心配だ。その口から飛び出して言葉に、全員が息を飲んだ。

「ルイズお嬢様が見えなくなりました。全員、直ちに手分けしてお探しします」

迷子!?

ルイズお嬢様はまだ4歳。森で迷子になったら帰って来られるとは思えない。この辺りにはオーク鬼のような危ない連中はいないと聞くけど、オオカミくらいは出そうな心配だ。

まごまごしてはられない。私たちはすぐに捜索にかかった。

メイド長の采配の元、空を飛べるブローチ組はそれぞれ方面を担当して高いところから捜索だ。

私もまた杖を振って宙に舞った。この際、スカートの裾など気にしてはいられない。

ルイズお嬢様に限らず、子供は一つの事に捉われると周囲が見えなくなるのが普通。蝶の後を追って森にでも入ったのだろうか。そういう私もまだまだ子供ではあるが。

そんな事を思いながら森の中を木から木に飛び移りながら声を張り上げる。

「お嬢様、ルイズお嬢様！」

甲高い私の叫び声が、吸い込まれるように森に消えていく。

5分ほども探した時だった。済ました耳に、

「ここよ」

と、細い声が聞こえた。

慌てて声の源に飛んでいくと、そこにべそをかいているルイズお嬢様がいた。

思ったより深く森に入っていた。今のお嬢様の身長では、方向が判らなくなるくらいには木々が多かった。

急いで駆け寄り確認するが、見たところお怪我はないようで一安心だ。

「お嬢様、お探ししました。御無事で何よりです」

「もっと早く探しに来なさいよ！」

強がってはいるけれど、目元は真っ赤で、私のスカート裾を掴む手は震えている。怖かったのだろう。

「申し訳ありません。次からはもっと早くに参ります」

そんな言葉を交わし、ルイズお嬢様のお気持ちを宥めながら来た道に戻る。残念ながら、私の体力と魔力ではルイズお嬢様を抱えて飛ぶことはできないし、お嬢様を置き去りにして人を呼びに行くわけにもいかない。

必然的に、お嬢様のお手を引いて徒歩で森の外に向かうことになった。

まだ小さいルイズお嬢様のお手はすごく暖かくて、繋いでいるだけで幸せな気分になってしまったのはちょっと不謹慎だったかも知れない。

ぐすぐすと泣いているルイズお嬢様を励ます術をあれこれ考え、

昔教えてもらった歌を歌うことにする。

森の中で熊さんに出会い、貝殻のイヤリングを拾ってもらって最後は歌を歌うという内容だ。

実際に熊に遭遇した場合はそんなことしていたら命が幾つあっても足りないのだが、ルイズお嬢様は私が歌う様子に徐々に笑顔を取り戻され、ちよつとずつ私の歌をなぞって歌い始めた。

そんなことをしていたから、ちよつと油断していたのかも知れない。

「あう!？」

ルイズお嬢様が木の根につまづき、バランスを崩して藪に足を踏み込んでしまった。

その途端、藪の中から大きな羽音が聞こえてきた。全身の血の気が引いた。

煙のように湧きあがったのは、無数の蜂だった。はずみで、地中にある蜂の巣を刺激してしまったのだろうか。確か、蛇の古い巣穴とかに蜂が巣を作ることがあると聞いた覚えがあった。

お嬢様の手を引いて逃げようとしたが、バランスを崩していたルイズお嬢様はそのまま足をもつれさせて転んでしまった。最悪だ。わんわんと音を立てながら、兵隊らしき蜂が飛んで来るのを見て、私は慌ててシールドのルーンを唱える。攻撃系の魔法が使えればいいのだが、所詮はドットの水メイジに過ぎない私だ。そこまでの力はない。

水の壁が周囲を覆い、蜂たちと私たちを隔てる。大きな蜂だった。一匹が体長4 سانتはある蜂が、カチカチと歯を鳴らして威嚇して来ている。相当怒っているようだ。

シールドは長くは持たない。砂時計が落ちるように精神力が減っていく。それに対し、周囲を舞う蜂の数がどんどん増えていく。

怯えるルイズお嬢様が腕にすがりついてくるが、私にもできる事はない。

そんなルイズお嬢様のお召し物は、白いワンピース。ふと、おじいちゃんに教わった事が頭をよぎった。

『蜂は、黒いものを襲うんだよ』

熊に蜜や蜂の子を食べられてしまったため、そういう習性があるのだとか。

そんな説明をしてくれながら、自作の防蜂装備を着こんで蜂の子を手に入れるべく蜂の巣に手を伸ばすおじいちゃんの姿はまだよく覚えている。その直後に、上を向いた弾みでガラス鉢みたいな頭の防護具がずっこけて、一気に蜂に襲われていたっけ。踏まれた猫みたいなき鳴を上げて、とてもお年寄りとは思えないスピードで川に逃げ込んで、頭から飛び込むおじいちゃん。そんなおじいちゃんを見ながら、

「あの人のドジは死ぬまで治らないんだろうねえ」

とおばあちゃんがため息をついていたっけ。そんな事を言いながらも、あとで一生懸命おじいちゃんが刺されたところに薬を塗ってあげてたおばあちゃん。二人とも、本当に仲良しだった。

そんな回想をしながら、私は手早くエプロンを脱いでルイズお嬢様に被せた。

「いいですか、お嬢様。そのまま、声を立てずに蹲っていて下さい。怖いかも知れませんが、何があっても動いてはいけませんよ。いいですね」

返事も待たずにお嬢様を押さえつけ、その上に体を被せ、できる

だけ服を広げてルイズお嬢様をカバーする。エプロンを取れば、メイド服は黒づくめだ。髪も黒。蜂の攻撃は私に集中するだろう。

防御態勢が整った辺りで、精神力がいよいよ切れる。

お腹に力を入れて身構える。

さあ、来い。いくつ刺されるか知らないけど、私だって度胸が売りのタニアっ娘だ。意地でもお嬢様には触らせない。

気合いを込めたところで、水の膜が弾けて消えた。

その途端に聞こえる凄まじい羽音。

怖い。できれば逃げたいくらい。でも、私の下で震えているお嬢様はもつと怖いだろう。

何力所刺されるだろうかと身構えていた時、私は自分の見積りの甘さを思い知った。

全部で20箇所くらいは刺されるかと思ったけど、襲って来たと思ったその一瞬に40カ所は刺された。

点じゃなくて面で刺されているような痛みが全身に走る。声をあげる余裕もない。気が狂いそうな激痛だ。どこもかしこも刺されている。頭に腕に背中。足も指先までまんべんなく。伏せている顔だけは何とか無事だ。耳のまわりを飛び交う蜂の羽音が頭の中まで響いてくる。私が固めたなけなしの覚悟は、焼けた岩に零した1滴水滴のように一瞬で蒸発してしまった。

激痛と言うレベルは一瞬で通り越して全身の感覚がなくなってしまい、そのまま私の意識は闇に落ちた。蜂の毒が回ったのかも知れない。気絶なんて、お母さんに魔法の特訓をされた時以来だった。

光を感じて目を開けると、私は包帯だらけになって自分のベッドで横になっていた。

枕元には水差し。手を伸ばそうとしたら、肌がひどい紫色をしていることに気付いた。記憶が混乱して何がどうなっているのか判らなかつたけど、すぐにルイズお嬢様のことを思い出して体を起こそうとした。

そして、力が入らなくてベッドからずっこけ落ちた。

「あ痛た〜」

「何をしているのですか、あなたは」

涙目を開けると、天地が逆さになった視界に、形がいい踝が見えた。そのまま視線をずらしていくと、洗面器を抱えたふくよかな胸元の彼方に悪戯っ子を見るような困った顔をしたミリアム女史の顔があつた。

ミリアム女史は洗面器を置くと杖を手に取り、ひよいと私をレビテーションで持ち上げてベッドの上に戻してくれる。

「蜂の毒が抜け切っていないから、まだ無理はできないそうですよ」

「あの、私、何でここに？」

「シンシアが見つけたのよ。ルイズお嬢様の泣き声が聞こえたから行ってみたら、あなたが森の中でお嬢様を庇うように蹲っていたって」

その話を聞いて、私は慌てて尋ねた。

「ルイズお嬢様は!？」

泡を食って喚く私に、ミリアム女史は笑って答えてくれた。

「ご無事でしたよ。傷一つなかったそうです。誰かさんのおかげですね」

その言葉に、心の中に安堵が広がる。良かった。何とかお守りできたようだ。私は深くため息をついた。

「その代わり、あなたは危うく死にかけましたよ。毒蜂相手に体を張るなんて、無茶をしたものです」

「しょうがなかったんですよ」

「判っています。とにかく、しばらくは大人しく寝ていなさい。扱いは公休ですから安心して休むといいですよ。午後にまた治療士が来てくれるそうです。それと、シンシアとソフィーにはお礼を言っておきなさい。ほとんど寝ずにあなたの様子を見ていましたよ」

「はい。メイド長もありがとうございます」

「私は何もしていませんよ」

何もしてくれていないと言いながらも、その洗面器は何なんだと
いうのだろうか。

手も荒れているし、目元も少々疲れが見える。

恐らく、シンシアとソフィーがいない間は彼女が世話をしてくれたのだらう。

でも、そのことを言うのはちょっと無作法な気がしたので黙っていた。

ともあれ、ルイズお嬢様に万が一がなくて良かった。

私の方は体の痺れが取れるまで2日かかり、その間にシンシアやソフィーが休憩の度に顔を出してくれた。

家政婦のヴァネッサ女史が来た時は、名誉の負傷ということでお褒めの言葉をいただけるのかと思ったら『シールドの持続時間が短すぎます。あなたのブローチはただの飾りですか』とみっちりお説教をいただいた。そんなこと言われても、トライアングルの女史と比べられては困ってしまう。まして正規の魔法の訓練も受けていないの上だ。お母さんは傭兵だっただけに魔法は上手いんだけど、とにかく教えるのがヘタな人だからなあ。体罰肯定派だし。

その後も、どういう訳かシンシアとソフィー以外は妙に優しさが足りない見舞客が多かったのだけど、その中の最たるところがエレオノールお嬢様だった。

「ここね」

横柄な声が聞こえ、ずかずかと足音が近づいてくる。ノックもなしにドアが開いて、入って来たのはエレオノールお嬢様だった。

「エレオノールお嬢様!？」

私のような末端のメイドは、普通は用事があれば家政婦や執事、

メイド長を通じてやり取りする。何しろ相手は本物のお姫様だ。そんなエレオノールお嬢様のようなやんごとなきお方がメイドの部屋みたいなむさいところに来る事など、あり得ないはずだけに私は大いにびっくりした。

「あなたがナミ？」

しかも、何故か私の名前まで知っている。私が知らないところで何が起きているのやら。

「こ、このような格好で申し訳ありません」

姿勢を正そうにも、体が痺れて動けないからどうにもならない。

「そうね。蜂に刺されたくらいで大げさなことだわ」

……いや、そうは言っても結構つらいっすよ、これ。

「まあ、いいわ。それより、これ、父からよ」

私のベッドサイドに瀟洒な小箱が置かれる。蓋が開いていて、そこにカメオのブローチが見えた。

浮き彫りになっているのはヴァリエール公爵家の家紋。

功績があつた人に下賜される、使用人にとっては勲章のようなものだ。売ればかなりのお金になるが、売る奴はいないだろう。それくらい名誉があるものだし、何よりすごいのが、これをもらった者は公爵家から幾ばくかの年金ももらえるという事だ。

「も、もったいのうございます」

「この度のあなたの働きに対するものよ。父と母も、それなりにあなたのことは評価しているわ。ありがたく受け取りなさい。まあ、その、あれよ」

視線を彷徨わせるエレオノールお嬢様。

「もしルイズが刺されていたら百叩きなところだったけど、無事だったし、まあ、私からも、その、よくやった、と言っておくわ。これから、その調子で忠勤に励みなさい。いいわね」

そつけない言い方だけど、エレオノールお嬢様が、どれだけルイズお嬢様を大事しているかが判って何だか気持ちが悪くなった。とかくキツイ女性と言われがちなエレオノールお嬢様だけど、接してみればこんなにも柔らかい感情をお持ちなのだとは初めて知った。

退室されるエレオノールお嬢様をベッドの上から見送って、私はベッドサイドのカメオを見た。

とりあえず、いつか年金がもらえたら、きっとシンシアとソフィーに何か美味しいものでも御馳走しよう。

何がいいかな、と思いながら午後を過ごした。

考えるのはいいのだけど、一人きりの午後と言うのは結構寂しいものだ。

窓から差し込む春の日差しを感じていると、何だか自分だけ世界からのけものにされているような気がしてくる。みんな一生懸命働いているだろうに、私だけのほほんと寝ている事は結構苦痛だ。生来、あまり一カ所ですっきりしている事は苦手な方だ。体を動かして

いる方が絶対に性に合っている。一人で寝ながら、遠くから聞こえて来るいろんな音に耳を澄ましているなんて、およそ私らしくない。

そんな私の聴覚が、ドアの方から微かな音を拾った。

見ると、ドアのところから少しだけ顔を出してルイズお嬢様が部屋の中を覗いていた。

「ルイズお嬢様!？」

驚いて声をかけると、ルイズお嬢様は心配そうな面持ちで部屋の中に入って来た。

「怪我、大丈夫？」

大丈夫じゃないですよ、とはさすがに言えない。

「大した事はありません。これはちょっと大げさなのです」

「ナニ」

ルイズお嬢様が私の名を呼んだ。どこで覚えたのだろうか。

「助けてくれてありがとう」

「と、とんでもありません」

いきなり感謝の言葉を述べられて、私は慌ててフォローを入れた。こっちは使用人だ。主家のために体を張るくらいは当たり前だろう。

「『しゅくじよたるもの、しようにんであってもおれいはいいなさ

い』ってエレオノールお姉様に言われたの」

「まあ。それは何とも、もったいのうございます」

私が笑うと、ルイズお嬢様も花のようにお笑いになる。

屈託なく笑うルイズお嬢様は、本当にとても愛らしい。この笑顔のためならば、体を張った甲斐もあったというものだ。身分の違いを度外視すれば、何だかおしゃまな妹ができたような気分だった。

それから、ルイズお嬢様といろいろなお話をした。

何もすることがなく、退屈していた私としても嬉しいお客様だ。

ご両親のこと、姉君たちのこと、中庭に池があることや、好きな食べ物に嫌いな食べ物。

楽しそうにお話になるルイズお嬢様の言葉に耳を傾け、相槌を打ち、問われたことにお答えする。

そんなやり取りの中で、成り行きでおとぎ話をする事になったのが、今に至る私たちの関係の始まりだった。

周囲を白鳥に囲まれてみにくいアヒルの子が戸惑っていると、白鳥の1羽が言いました。

「こんにちは、美しい羽根の新人さん」

美しいと言われて驚いたみにくいアヒルの子は、その時初めて水に映った自分の姿に気づきました。

水に映っていたのは、真っ白な、それはそれは美しい白鳥だったのです。

それがきつかけで、私はしばしばルイズお嬢様からお話をするよ
う仰せつかる事となった。

「何だか畏れ多い話だが、ルイズお嬢様が喜んでおられるのだから
いいのだろう。」

そんな感じにルイズお嬢様と接している事を聞いたのか、エレオ
ノールお嬢様がしばしば私にルイズお嬢様の事をお聞きになられる
ようになったのもこの頃だった。それがエレオノールお嬢様がルイ
ズお嬢様へのメッセンジャーとして私をお使いになるようになる今
の状況に繋がっている。

一介のハウスメイドとしては何とも恐縮するばかりなのだが、何
となく不器用なエレオノールお嬢様と、天真爛漫なルイズお嬢様。
お二人の間を繋ぐ一助になれるなら、これもまた使用人冥利に尽き
るというものだろう。

客間に着くと、そこは戦場だった。

幾人もの先輩のメイドたちが、部屋の中で作業に追われている。

「うひゃあ、こっちはまだまだ大変だね」

私とシンシアも即参戦だ。

リネン担当らしい、シーツの山を抱えている先輩に声をかける。

「リネンの手伝いに来ました」

「ありがとう、助かるわ。さっそくだけど、あっちのシーツの山をお願い」

「了解です」

そんな一日。

第4話（後書き）

0617

某所に投稿している作品が佳境でして、リソースがそっちに持って行かれており、なかなか続きが書けません。そっちが落ち着き次第続きをお送りいたします。エタってはおりませんので今しばらくお待ちください。

第5話

「お待たせ、お茶ですよ」

穏やかな午後、お茶当番の私とシンシアは、お城の南側に足を運んだ。

敷地内の一番日当たりがいい、眺めがいい場所だ。

そこで男性使用人が2人、大きな石碑の周囲の手入れにホウキを手に奮闘していた。

「お、待ってたよ」

嬉しそうな顔で真っ先に来たのがジャンだ。今日は外の当番か。こうして外掃除の装備を身につけていると、どこかの大店の丁稚のように見える。青年になりかけの年頃であるジャンは目鼻立ちが悪くないのだが、何気にまだまだ外見がガキ大将っぽいイメージがある。

「御苦労様。もうちょっとかかる？」

「ん、あとは碑の本体だけだから小一時間つてとこ。さすがに、こればかりは丁寧にやらないと怒られちゃうからな。先輩、お茶が届いたっすよ！」

仕事なんだからここ以外も丁寧にやらんかい、と言いたいところだが、これでジャンは仕事ができる人だ。そんなジャンが声をかけると、やや離れたところでチリ取りを持った男の人が振り返った。二十代半ばの線の細い、目鼻立ちが整った優しい顔立ちの人だ。名前はアラン。物腰も見た目同様に柔らかいが、もうちょっと覇

気があるともつといいと思う。軍隊だとちょっと通用しなさそうな気がしないでもないが、誰にでも優しいので女性の受けは悪くない。快活な好男児なジャンとは対極に位置するような物静かな人だ。その胸元には黒いブローチ。アランもまた風のメイジだ。生まれのことはよく知らないけど、下級貴族の三男坊という噂を聞いている。ジャンは、自分よりも10歳ほど年上のこの人と良く組んで仕事をしている。

「ありがとう。いただくよ」

そんな彼らにお茶を淹れるシンシアの隣で、彼らが手入れをしていた石碑を見つめた。

石碑の名を、『使い魔塚』と言う。

メイジと言えば使い魔。そう思う人は多いと思う。メイジを見るには使い魔を見よと言うくらいだから、メイジにとっては使い魔はとても重要な存在だ。

実際、この国の中核を支えていくメイジを養成している魔法学院では、進級の際の評価の為に『春の使い魔召喚』としてイベント化しているくらいだ。

私もまた、メイジの端くれだから使い魔と言うものにも当然憧れはある。

でも、実際には使い魔召喚の魔法『サモン・サーヴァント』をやる予定は今のところない。

使い魔召喚では、何が召喚されるか判らないからだ。

どういう使い魔を召喚するかは、メイジ当人は選べない。私の家は、まあ普通より少し経済的に余裕がある商家だからたいいの生き物なら養育はできると思っけど、稀にすごく大食いな使い魔が出て来るともあるだけに、うっかりした事はできない。動物を飼

うのは大変なことだ。犬でも大型犬になると餌を結構食べるし、馬なんか桶でご飯をあげるくらい。ドラゴンなんか召喚したら大変だ。王族ならともかく、平民や下級貴族では毎食豚を一匹食べるような大きな生き物なんか養えない。使い魔召喚ではほとんどの場合がごくありふれた動物を召喚するけれど、稀にそういう大型種を呼んじやったりするから大変なのだ。うっかり召喚して、ごめん、養えないじゃ使い魔が可哀そうだし、考えなしに使い魔を呼び出す事は最も恥ずべきことというのがメイジたちの不文律でもある。使い魔を飢え死にさせてもしたら、それこそメイジ社会から村八分にされてしまうだろう。

そういう意味では使い魔を呼び出せると言うのは一つのステータスであり、魔法学院に行けるような裕福な家の子じゃないとそうそうやる訳にはいかないものなのだ。

いつかは使い魔を持てるくらいにはなりたい、というのは私のような下っぱのそのまた下っぱのメイジたちの合言葉でもある。

目の前の『使い魔塚』は、そんな代々のヴァリエール家の方々が召喚した使い魔たちのお墓だ。

ヴァリエール公爵家のような歴史ある家の場合、本家の庭には大抵こういった使い魔を祀る祭壇やモニュメントがある。当代の御当主が、日に一度お参りするのを日課にしている家も少なくないと聞く。

それくらい、メイジにとって使い魔は大切なものなのだ。

多くの場合、使い魔はごくありふれた動物が呼ばれるし、ドラゴンみたいに極端な長寿種が召喚される方が珍しいのは確かだ。でもそれは同時に、大抵の使い魔はメイジよりは短命であり、そのメイジは必ずと言っていいほど使い魔の死に立ち合わなければならぬと言っことでもある。

メイジと使い魔は一心同体。召喚した使い魔に、メイジは本当に惜しみなく愛情を注ぐ。それだけに、人間よりも先に老いて死んで

しまう使い魔を失った時の悲しみは、とてつもなく深いものになると聞いている。愛玩動物を失う悲しみの比ではない、まさに自分の一部を失うようなものだと言う人もいる。

実際、軍人のように割り切った職種の人たちでもない限り、一度使い魔を失ったメイジは二度と使い魔を召喚しようとしならしい。私の知っているメイジにも2代目の使い魔を召喚しようとしなしい人が結構いる。身近なところだと、家政婦のヴァネッサ女史だ。使用人を統べる立場の彼女は使い魔の帯同を公爵家から許されているけど、幾ら勧められても召喚しようとしなしい。気持ちは何となく想像できる。彼女と彼女の使い魔の間にもどのような絆があったのかは、余人の知るところではないのだろう。

魔法学院と言えば、エレオノールお嬢様はこの春に使い魔召喚をされたと思う。詳しい事を聞いてはいないけど、優秀なメイジの彼女なら、きつと素晴らしい使い魔を呼び出したことだろう。

そんな彼女が、いつの日か使い魔を亡くす日が来るのかと思うと胸が詰まる。敵しいように見えて、お優しい方だ。縁起でもない心配だけど、この碑を見ていると、そんな後ろ向きな思考に捕われる。

そんな事を考えていた時だった。

「あら、今から一服ですか？」

凜とした声が聞こえ、振り返ると、メイド長がブラシ類を持って足早に歩いてくるのが見えた。片手にはバケツ。どれも使い魔塚専用の清掃用具だ。

メイジの分身たる使い魔のお墓だけに、碑そのものの手入れはブローチ組の仕事だ。それも、相応に立場がある人だけに任される仕事でもある。メイド長である彼女はその任によく当たっている。

「はい。ちょうど今からです」

「そうですか。ちょっと早すぎましたね」

ややばつが悪そうなミリラム女史に、私は笑って応えた。

「いいんじゃないですか、メイド長も休憩入れても。じゃあ、私たちはミスタ・ドラクロワに回りますから。シンシア、行こう」

「御苦労さま」

歩き出そうとして、私は一息にお茶を飲みほしているジャンに声をかけた。

「あ、それとジャン、悪いけど、ちょっと力仕事あるのよ。少しだけ手伝ってくれないかな」

「ん？」

私の言葉にジャンはアランを振り向くと、アランは笑って

「いいよ、行ってきなよ。しばらくは大丈夫だから」

と朗らかに応える。

「んじゃ、ちょっと行って来ます」

ジャンを連れてシンシアと私はその場を離れる。園丁小屋に着き、

そこでミスタ・ドラクローワとどうでもいい世間話を少々。

「おい」

10分も時間が経って、さすがにジャンが声をあげる。

「力仕事ってのは何だよ？」

そろそろ潮時だ。私は種を明かすことにした。

「ああ、ここまで来るのが力仕事よ」

「何だって？」

事の次第が飲み込めないジャンが首を傾げる。まあ、普通はそうだよ。

「そうね、もう戻ってもいい頃かも」

私の共犯者たるシンシアも、善意の協力者であるジャンに向かって朗らかに微笑む。

「どういうことだよ？」

「さあね。とにかく、もう戻っていいわよ。でも、できればゆっくり戻ってね」

「訳わかんねえよ」

むう、まだ判らないか。

「判らなかつたら、既舎経由で帰るといいわ。きつと蹴飛ばしても
らえるから」

そこまでヒントを出して、ようやくジャンの顔に理解の色が浮かぶ。お調子者っぽいけど、ジャンはこういつことの機微には結構鈍感なようだ。

「……マジ!？」

「吹聴しちゃダメだよ」

「しねえよ。へえ、あのメイド長がねえ……」

何だか複雑そうで、でも楽しそうな顔をするジャン。これでこいつは義理堅い奴だから、あちこちでペラペラ喋ったりはしないだろう。もともと、味方に引き込むつもりだったのだからいい機会だ。

「さつきもあの時間に秒単位で正確なメイド長が、早く来すぎたって言ってたでしょ?」

「言われてみればだなあ。近寄りが見えたいように見えて、案外可愛いところあるんだな、あの人」

「アランの方も、そう憎からず、って感じだと思っけど?」

宙を仰いで、これまでのことを反芻するジャン。やがて腕を組んで唸りだした。

「気付かなかつたなあ……お前ら、こつこつこと面白い事はもつと

早く言えよ」

そんな楽しそうなジャンに、シンシアは眉を顰めた。

「からかったりしないで見守ってあげてね」

「しねえしねえ。あいつらくつつける方がからかうより面白いじゃねえか」

これで男側の方にも『アランとミリアム女史を応援する会』の会員を確保できた。

他人の恋路はよその国の戦争くらい面白いという人もいるが、そういう目的はさておき、何とかうまくくつついて欲しい二人だ。二人ともいい人だし、私も二人が好きだ。でも、双方ともに生真面目で奥手なのが問題だったりする。火を点けるには苦労が要りそうだ。

そんなことを考えていると、ミスタ・ドラクローワがおやつ焼き栗を持ってきてくれた。

役得の味わいを堪能する、そんな午後。

第5話(後書き)

ちょっと短めで。

幕間

お城と言うのは、由緒あるものが多い。

軍事的な側面における地形として有利な場所と言うのは昔からあまり変わらないし、城が落ちた場合でも、たいてい寄せ手もその場所を使うから、城自体には自然と歴史が積み重なっていくものなのだそう。

そんなお城の一つであるヴァリエールのお城も、それなりに由緒があるらしい。

確かに佇まいや中の構造を見ると、幾代にも渡って増築改築を繰り返してきた気配がある。

ここは隣国と接する最前線。ツエルプストー領を抱えるゲルマニアは建国してからあまり時間が経っていないけれど、周辺の豪族などとの小競り合いは大昔から事欠かなかったことだろう。

要するに、このお城は血を吸ったこともあるかも知れないお城と言うわけだ。

公爵家の歴史を聞く範囲では落城の憂き目を見た事はないようだけど、寄せ手が正面の跳ね橋まで迫ったことくらいはあったのかと思うと、のほほんと見ている景色が急に凄惨さを帯びて来る気がする。

その前提で改めて城の作りを見ると、確かに施設が非常に機能的に出来ているように思う。大砲などに晒される場所の石垣はやたらと厚いし、ゴーレム対策の濠や塔も実的に確な配置になっている。正面口の虎口のあたりの銃眼の位置なんかは、見ると『寄せ手は皆殺しじゃ〜』と殺る気まんまんな雰囲気がある。人が作りうる最大級の武器の一つ。それがお城なのだろうと素人ながら思ったりもする。

そんなお城だけど、やたらと大きいだけあって、さすがにそのす

べてをいつも使っている訳ではなく、日頃はあまり人が出入りしないエリアと言うのも存在する。

私とシンシアの今日の担当はそんなお城の中の滅多に行かない、たくさんある建物の中でも年に数回程度行っ塔の掃除だった。

用具入れから道具を持ち出し、二人してえっちらおっちら中庭を横切る。

メイドというのは基本的に力仕事だ。脚立や洗剤のようなものを抱えて歩くのも商売の内。そのため、どうしたって筋肉がついてくるけど、そこを衆目に晒さないようにするには女ならではの技術が要る。殿方たる者、そういう女の隠れた努力にも気付いてあげべきだと思ったりもする。

辿りついたのは、敷地の西側にある大きな塔だ。4層の防御壁塔というものだそうで、尖塔ではなくてつぺんは平らで、その縁にはツインネとか言うギザギザの狭間がある。

戦いになったらそこから物見をしたりするようだけど、塔本体には窓の類は銃眼でもある狭間窓以外は最低限の明かり取り以外あまり開いていない。一見そんなごくありふれたただの石造りの塔だけど、実際には防御の要だけあってゴレム対策の硬化・固定化処理は幾重にもかけられているのだそう。そんな外壁には全体的に水垢や苔が生じていて、何とも言えない味わいを醸し出している。時間が織りなすアートという感じだ。

「それで、その王子様ってのがひどい奴でさ、ラプンツェルの髪の毛をロープにして塔をよじ登るのよ」

「それって結構ひどくない？」

「でしょ？ 幾ら王子様でも、そう言う人はちょっとねえ。それに、その後がもっとひどくてさ……」

塔をテーマにしたしょうもない話をしながら塔に向かって歩いてみると、いきなり舌足らずな大声が聞こえて来た。

「二人とも遅い〜！」

塔の入口の前でホウキを片手に持ってぶんぶん振っているのは、同僚のタルトだ。

茶色い髪の毛のちっちゃな子だけど、年齢は私たちより上だったはず。どう見ても年下にしか見えないあたりは気の毒というか何と云うか。

「ごめんごめん。ちょっと脚立の留め金が壊れてたから直してたんだ」

「ありや、それは危ないね」

そんな感じに合流し、今日はこの三人で一仕事だ。

塔の中は、使っていないだけに少々カビ臭い空気が漂う。陽が差さないので仕方がないけど、雰囲気はちょっと幽霊でも出そうな感じだ。

こう暗くては仕事にならないので、魔法で明かりを点ける。

その灯に照らされた室内を見ると、それなりに広い室内は想像以上にがらんとした。有事の際には兵の詰所や資材置き場になるためか、平時は無駄な物はあまり置かないのかも知れない。

お城というのは何かあった場合、敵の攻撃を長期に渡って防ぎ続けなければならぬ施設だ。立て籠もって戦うことになれば、その間は兵隊さんに武器を与え、備蓄を削ってご飯を食べさせなければならぬ。それらの備蓄量が、どれくらい籠城できるかという継続

能力に直結する要素なのは私にも判る。

攻めて来られてどんどんぱちぱちと闘う話は英雄譚に幾らでもあ
るけど、こういうお城の機能を見ていると、よほど戦力に差がない
とそうそう正面切ってお城を攻めるといいうのはなかなか難しい仕事
だと思う。

英雄譚と違い、実際にはお城を攻める時は水攻めとか兵糧攻めと
いった地味で嫌らしい攻撃がよく用いられるとか。聞くところによ
れば、籠城して取り囲まれて食べ物がなくなったお城というのはか
なり悲惨なものらしい。おじいちゃんが夏の夜の怪談で話してくれ
た『トットリ城』というお話はそんな籠城の話だったけど、あまり
に後味が悪くて今でも正直聞くんじゃなかったと思う。

この塔は、下の3層はがらんとした空間になっているけど、一番
上のフロアは物置になっている。その最上階の物置のやけに分厚い
木製のドアをよいしょと開けると、ぽっかりと闇色の広い空間が広
がっていた。

「うわ〜……」

部屋の中にあるマジックライトで照らし出された品々を見て、私
たちは唖ってしまった。

棚にかけられた剣や槍、弩に矢立て、端っこの方にはバリスタな
んかが置いてあった。これで大砲があれば、陸戦兵器の見本市みた
いだ。

どれも朽ちている訳ではなく、現役感漂う剣呑な輝きを発してい
る。それぞれの刃は研ぎ澄まされ、引かれた油が妖しい説得力を醸し
出している。人を殺す道具というのは、やはり独特の凄味があると
思う。

「結構埃っぽいね〜」

そんな事を言いながら真つ先に中に踏み込んだタルトの足元に、
うっすらと靴の跡がつく。確かに凄い埃だ。

「とりあえず、窓を開けようよ」

シンシアの提案に私は頷いた。

「そうだね。シンシア、あれで行くの？」

「それが一番早いじゃない」

笑って頷くシンシアの得意技を思うと、私には異論をはさむ余地はない。

「それじゃ、ぱっぱとやっちゃおう」

話を理解したタルトが軽い足取りで窓に取りついていく。私も行動力には自信がある方だけど、こういうフットワークはタルトには敵わない。

「それじゃ、私は下から開けて来るよ」

負けじと狭い階段を降りて、1階から鎧戸を開けて回る。

ソフィーに教えてもらったんだけど、お城の塔にある螺旋階段は、多くの場合上りが右回りになっているんだそうだ。攻め上ってくる敵は剣を持つ右の方が狭く、逆に守るほうは右手が広くなっているので守る方が有利になるようにしているのが理由だとか。

そんな階段に一定間隔で並んでいる鎧戸は、固定化のために錆びは回っていないけど、油が切れているのか動きが少々渋い窓が多い。

あとでジャンに言って油をさしてもらおう。

そんなことを考えながら窓という窓を開け放って、3人揃って1階の入口に陣取った。掃除は上からやるのがセオリーだけど、これからやる作業はこっちの方が都合がいいからだ。

「それじゃ、やるわよ」

「ちょっと待って。これこれ」

杖を構えるシンシアに、私は待ったをかけた。

エプロンのポケットから、こんなこともあるつかと用意しておいた赤いリボンを取り出す。これからの作業では、髪をまとめておいた方がいいからだ。でも。

「ありゃ？」

迂闊にもリボンが1本足りなかった。人数分用意し忘れちゃったか。

仕方がないのでそのまま二人にリボンを渡す。

「あれ、ナミの分は？」

リボンで癖っ毛をまとめるタルトの問いに、私は持っていたタオルを見せる。

「私はこれでいいわ」

それを頭に被って角を後頭部できゅっと結ぶ。

「ふっふっふ、どっぴっ？」

「これぞ、おじいちゃん直伝の『姉さんかぶり』。掃除をする時とか、非常に便利なのよね、これ。」

「可愛いじゃない、それ」

そんな私を見て緩み始めるシンシアの顔。困った子だ。

「へえ、リボンでまとめるより良くない〜?」

まじまじと見ているタルトの視線にちよつと優越感。

「さあ、始めるわよ」

シンシアが宣言し、杖を構えた。

ルーンを唱えると、彼女を中心に空気が渦を巻き始める。程なく現れるのは、大人くらいの大きさの竜巻だ。

「ひゃー!」

リボンで結った二人の髪が風に吹かれてばば〜と靡く。私の方は姉さんかぶりがずっこけそうだ。

シンシアは風のメイジ。ドットだからあまり凄いことはできないけど、掃除の時に竜巻を起こして埃を巻き上げるくらいは余裕なのだそうだ。

杖を振って竜巻を操り、室内の埃をくまなく舐め取っていく。見ていると本当に便利だなあ、と思う。水の魔法でも似たような事出来ないかしら。

下から順に作業を進めて、最後は屋上に出る。そこから埃を溜めこんですっかり黒い渦になった竜巻を屋外に追い出して最初の埃落としては終了だ。

シンシア竜巻の魔法を解くと、埃が宙でポワツと広がって雲みたいになるから面白い。風向きを考えてやらないと城内に埃が入って怒られちゃうけど。

そんなシンシアの隣で、タルトが大きく背伸びした。

「うーん、景色いいね〜」

彼女の言葉のとおり、屋上から見る景色は、実に綺麗だ。森が多いヴァリエールの領地はかなり先まで見通すことができるだけに、今日みたいに天気がいいと実に気分がいい。

「ほら、お仕事お仕事」

タルトと並んでポケッと景色を眺めていると、シンシアが一足先に塔内に戻って行った。

うーん、もうちょっとのんびり見ていない気もするけど、お仕事第一だからここは我慢だ。

埃落としが一段落したところで、魔法を使ったシンシアはご苦労様と言うことで上層階の物置部屋のハタキがけ作業をやってもらい、下の階は私とタルトでやつつける。

ハタキで細かい埃を落として回り、次に水を汲んできてモップで手分けして床を拭きあげていく。

軽い足取りでモップを振るうタルトの動きは、さながらダンスのようだ。本当に楽しそうに仕事をしている姿は、見ているだけでこっちも楽しい。

お仕事の中に楽しさや幸せを見つけることが人生をいいものにするコツだとお父さんには言われているけど、今のタルトを見ているとその言葉の意味が良く解る気がする。

そんな調子でどどどと床を拭いて回り、物置部屋以外を一通り拭き終わったところで一息だ。
時刻はちょうどお昼になった。

「さあ、お昼にしましょう」

シンシアがバスケットを手に屋上へ上がっていくのに続いて、私たちも屋上へ出る。今日は厨房にサンドイッチを作ってもらったので、特等席でお昼御飯だ。

私が魔法で作った水で手を洗い、皆でサンドイッチに手を伸ばす。バスケットと一緒に持ってきたボトルに入ったお茶を皆で回し飲みし、取り留めもない話をしながら食べる御飯は実に美味しい。それに加えて景色もいいから気分は最高だ。

午後の作業はシンシアに合流して物置部屋の掃除。ハタキと雑巾で調度や備品を拭いていく。そんな作業をしている時だった。

「ねえ、ちょっと見て見て」

レビテーションで浮き上がりながら大きな棚の上の方に雑巾をかけていたシンシアが、ふわりと床に降り立った。何かとタルトと一緒に視線を向けると、シンシアの手の中に、小さなブロンズの置き物があった。

「可愛いでしょ、これ」

緩んだ顔で、嬉しそうに置き物を私たちに見せる。
それは小人を模った、シンプルながら素敵な意匠の立像だった。

「わ、可愛いね。何、これ？」

私の問いに、シンシアが記憶を掘り起こすような顔をした。

「その棚の上にあったの。土の妖精みたいね」

「土の妖精？」

私も、妖精の伝説は幾つか聞いたことがあるけど、その置き物を見ながらシンシアが興味深い事を言い始めた。

「多分、ヴァリエール地方の伝承にある妖精さんだと思うわ、これ」

夜にたまにお互いの手持ちの話をするところがあるんだけど、おとぎ話として知っている私と違い、下級とは言え貴族のシンシアは教養があるから各地方の伝承に結構詳しい。この妖精も、そう言った土着の伝説の一つなのかも知れない。

「いい妖精さんの？」

「確か、家に繁栄をもたらす妖精で、皆が楽しそうにしていると現れて、いつの間にか輪に入って一緒に遊んだりするっていう妖精だと思っただわ」

「へえ……何だか座敷わらしみたい」

「ザシキワラシ？」

隣で聞いていたタルトが首を傾げた。

「うん。そういうお話があるの。子供が遊んできると、いつの間にか座敷わらしっていう子供の妖精さんが仲間に入って一緒に遊んでいくんだって。それと、座敷わらしがいる家は繁栄すると言われて、多くの家では専用の部屋を用意して、お供物を捧げるっていうお話」

へえ、と感心するタルトの隣で、シンシアは緩んだ顔で妖精像を撫で回している。今のところ無害だからいいけど、この子のこの性癖、何とかならないかしら。

シンシアがひとしきり妖精像を愛でてから、掃除を再開。

シンシアが改めて件の妖精さんの置き物を丁寧に拭いているのを見て、何となく子犬を撫でているみたいな手つきだったので笑ってしまった。

その向こうで、タルトはタルトで相変わらずすごいスピードで棚を拭きあげていく。

むっ、こつちも負けちゃいけない。

雑巾を手早く絞って作業の仕上げを急いだ。

結構広い塔だったけど、昼下がりには一応の作業は終わった。

「うん、なかなかの出来栄だね」

掃除が行き届き、磨き上げられた部屋というのはどこか神殿のよ
うな凜とした気配がすると思う。メイドの中には、こういう雰囲気
が好きだからメイドをやっていると言う人もいるらしい。もちろん、
私もこういう雰囲気は嫌いじゃない。達成感もあるし。

「思ったより早く終わったね」

シンシアも納得の面もちで最後の確認をしていく。きちんと窓枠
まで磨いたから問題はないはずだ。シンシアのチェックが進む中、
タルトが脚立をよいしょと担ぎ上げた。

「大きな物はもう片付けていいよね？」

「あ、それ私が持つよ？」

体格が小さいタルトが一番の大荷物を運ぶのも、なんか変だと思
うし。

「いいよ。帰りは私が運ぶ」

「そう、じゃあお願い。バケツなんかは私が持って行くから」

「了解」

そう言い残して一足先に用具を戻しに行くタルト。体格は小さい
のに、折り畳み式の木製の脚立を担いでもタルトの足取りはしっか
りしていた。見かけによらず、結構力持ちだ。

シンシアの確認が終わってから用具置き場に用具を戻し、使用人ホールに向かう。時計を見れば、ちょうどお茶の時間だ。

他所も一段落した部署が多いためか、ホールに戻ったら数名のメイドがお茶をいただいていた。

「あれ、タルトいないね？」

私とシンシアは辺りを見回すが、そこにタルトの姿はない。トイレにでも行っているのだろうか？

そんな私たちに気付いたのか、テーブルの端っことお茶を飲んでいたソフィーが振り向いた。

「お疲れ。そっちは進捗はどうだ？」

今日の彼女は面倒な客間清掃の担当だったはず。とげとげした置き物とかが多いから時間がかかる仕事なだけで、それなのに私たちより先にお茶しているとは、さすがはソフィー、なかなかの手際だと思つう。

「ふっふっふ、終わったよ」

胸を張って応える私に、ソフィーは目を丸くした。

「ほう、早いな。結構広いだろう、あそこ」

「3人いたからね。思ったより楽だったよ」

「3人？」

ソフィーが不思議そうに首を傾げた。何か変な事言ったかな、私。

「誰だ？ お前とシンシアと……」

「タルトよ。私たちより先に戻ったはずなんだけど、見なかった？」

「タルト？」

「そう。タルト」

「……これか？」

ソフィーはそう言うと、お皿に乗った今日の茶菓子を私に差し出しました。

香ばしくて、美味しそうなアップルタルト。

「……？」

私とシンシアは思わず顔を見合わせた。

綺麗に清められた物置き部屋の片隅で、小さな窓から差し込む午後の光を受けて淡く光る、赤いリボンを首に巻いた妖精の置き物が一つ。

幕間（後書き）

別作品にエネルギー傾けすぎて少々燃え尽き気味なので、リハビリ的投稿をば。

今回の話ですが、どこかで読んだすごくきれいなお話をもとにオマージュとして執筆しました。

これを読んで、同じような作品に心当たりがありましたら是非ご教示いただけましたら幸いです。

作者、作品名、掲載誌、掲載時期など全くわかりませんが、確か酒屋と座敷童のお話だったと思います。

自力ではどうにも調べが付かなかったので、ご存知の方がおられましたらよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0822t/>

公爵家の片隅で

2011年9月2日01時08分発行